

観光マップ×域内循環～付度なしでまちの未来を作る観光マップを考えてみた～

発表要旨

国語の授業で「函館のこれから」について話し合ったとき、私たちは函館の人口問題に注目した。さらに、交流人口に目を向けたとき、函館の観光資源を使った修学旅行生向けの観光マップを作り、函館をPRしたいと考えた。

私たちは自分たちの修学旅行の経験から、「修学旅行生は、学校から配布されるガイドブックや観光マップなどの限られた情報から、昼食やデザートを選んでいるのではないか」と仮説を立てた。函館においても、オーバーツーリズムが表面化している一方で、外資系企業の囲い込みの影響などにより地元にお金が回らない問題が起きているため、地元の会社に頑張ってほしいと思っている。

私たちの最終的な仮説は、「個人のお店にお客を呼び込むことで、域内経済循環が促進できるのではないか」である。地元資本のお店だけを扱った観光・食べ歩きマップを作ることで、地元資本のお店を支援したいと考えている。

この観光マップの作成により、私たちは修学旅行生に函館の魅力を知ってもらい、またリピーターになってもらうことで交流人口を増やし、函館に間接的に支援したい。この活動により、函館の経済が活性化すると考える。

1. 背景と目的

函館には年間 46 万 8 千人（2019 年度）の外国人が訪れる。近年の函館は、外資系企業によりホテルが買収されたり、日本語以外のラッピングが施された観光バスが走っていたりする。外国人観光客が外資系企業にお金を落としているため、函館を訪問する観光客数ほどのお金が地元にと落ちていないと私たちは感じている。しかし、その実態は掴めていない。私たちは、自主研修等を行う修学旅行生に対して、地元企業の利活用を促す観光マップを作り、函館のイメージ向上を図りたい。また、観光マップを利用した修学旅行生に少しでも多くのお金を地元企業に落としてもらい、地域経済の活性化を目指したい。

2. 方法

外資系企業の囲い込みに関するリサーチは、実態が掴めないところもあり、旅行代理店などにヒアリングを行っている。一方で、旅行ガイドに掲載されていない西部地区の飲食店や、映えスポットなどについて、地元のクラウドファンディングで資金集めて実際に観光マップを作り、観光案内所や旅行代理店等で配布する。観光マップ作成のために実際に数十店の店舗に赴いて取材を行い、現在も活動を継続している。

3. 結果

まだクラウドファンディングも、見積もりもできてないので、まずは見積もりから始めたい。

4. 結論

この観光マップを作ることで函館に興味を持ってくれる道内外の学生が増え、函館の魅力を高校生の声で伝えることができる。Google などのマップを活用して作成するのは著作権の侵害にあたりと知り、学生だけの観光マップ作成は難しいことがわかった。今後、業者等と連携しながら取り組んでいきたい。

5. 今後の課題

印刷会社に見積もりをとり、現在相談している「はこだて西部まちづく Re-design」などの会社と連携しながら、クラウドファンディングで資金調達を行い、1 万枚を作成する予定である。

6. 参考文献

<https://diamond.jp/articles/-/332853>

（外資系囲い込みモデルについての『ダイヤモンド・オンライン』の記事）

7. IT・データサイエンスの活用

RESAS のうち 1 観光客の訪問分析と滞在分析、2 地域経済循環マップの地域経済循環図を主に活用（<https://resas.go.jp/#/1/01202>）